

特別寄稿

私のブラームス体験

原田 茂 生

ブラームスの音楽に私が初めて接したのは「ヴァイオリン・ソナタ二短調」と「交響曲第3番」だった。父のレコード・コレクションの中にあったこれらの曲を当時中学生だった兄が聴いていたのを、小学生だった私が割り込んで一緒に聴かせてもらったのがきっかけで何となく好きになり、そのあと一人でそのレコードを引っ張り出して聴くようになった。もちろんその頃のことであるからSPレコードで、それも竹針を切って手巻きの蓄音機で聴いた。交響曲の方の指揮が誰だったか忘れてしまったが、「ヴァイオリン・ソナタ」はエフレム・ジムバリストがヴァイオリンを弾いていた。のちに江藤俊哉が渡米してカーチス音楽院でジムバリストに師事したという話が日本に伝わって来たとき、「ああ、あの人か」と思ったことを覚えている。子供の耳というものは大人が想像するよりはずっと許容度が広いのだろうか。ブラームスの作品の中でもむしろ渋い方に属するこれらの曲を、「白鳥の湖」、や「未完成などどごっちゃまぜにして、何の矛盾もなく聴いていた。その思い出のレコード、その後どこへ行ったのやら、今は手許にないが、ジムバリストの弾いた

「ヴァイオリン・ソナタ」など復刻盤で入手可能なのだろうか。

そのあとのブラームス体験の記憶は、小学生時代から一挙に京大の学生時代にとぶ。レコードがやっとLPになったばかりで、学生の分際では当時1800円もしたLPレコードなど自分で買うことはできなかった。だから、よく京都のアメリカ文化センターの試験室に聴きに行ったものだった。もちろん当時は共同の試験室で、自分がリクエストしたレコー



ドをかけてもらう前に、先に来た人の注文したレコードを聴いて待っているのが常だった。そこで初めて知った曲の一つにブラームスの「ピアノ協奏曲変ロ長調」がある。今でこそこの曲はブラームスの音楽の中でも最もポピュラーなものの中に入るが、当時はむしろめずらしい曲に属していた。ピアノ協奏曲とはいっても、あまりにオーケストラと密にからみ合ったピアノ・パートの書法に初めは面喰ったものだが、何回もお付き合いで聴かされている内に、だんだん良さがわかって来て、おしまいには私の一番好きな曲の一つになってしまった。確かにこのレコードはルドルフ・ゼルキンがオーマンディ指揮のフィラデルフィア・オーケストラと入れたものだったと思う。

ブラームスの歌曲の存在を知ったのもやはりこの頃で、京大の音楽研究会というクラブに入って「五月の夜」や「永遠の愛」などを歌っていた。京大にはもちろんオーケストラや合唱団があるのだが、この「音研」は我こそソリストと自負する天狗どもの集まりで、年に何回か吉田分校（もと第三高等学校）の新聴会というホールで発表会をした。現在京大の独文の教授でフルトヴェングラー関係の本の翻訳などで有名な芦津丈夫氏、また現在名古屋市立大学の精神病理学の教授でやはり音楽書の翻訳や精神病関係の著書を多く出している木村敏氏など、同じ頃この「音研」にいてピアノを弾いていた。私の伴奏をしてくれたのもこの木村敏氏である。SPだったが、ホッターのブラームスの歌曲のレコードが出て、「森の淋しさ」や「サフォ頌歌」を知ったのもその頃である。ホッターというところより、1950年代後半にブラームスの歌曲ばかり入れたLPレコードがコロンビアから出て、私はこのレコードから大きな影響を受けた。特にこのレコードで初めて知った「とく来れ」、「われさすらいぬ」、「便り」、「教会墓地にて」、「裏切り」などは今聴いてもすばらしい演奏で、最後の曲以外は現在でも私のレパートリーに入っている。（幸いなことにこの録音は東芝「セラフィム・シリーズ」で再プレスされて、現在入手可能である。）

話を少しもどすが、上述の「音研」でさかんに歌っていた頃、冬休みで帰省した高松にソプラノのエルナ・ベルガーが来てドイツ歌曲によるリサイタルを開いた。戦災にあった高松ではその頃ピアノがどこにでもあるという状態ではなく、ベルガー女子は我が家にあったアップライトのぼろピアノでリサイタル前の発声練習をした。あらゆる種類の動きをもったパッセージを何回となく繰返しながら一時間以上

も練習をし、それが終るとお湯を所望、それぞれ持参のネスカフェを溶かして飲み、やはり持参の卵の黄味一箇分をすすって会場に向った。彼女のいわば修道女のような地味な雰囲気と芸術に対する真摯な姿勢には本当に心を打たれたものだった。その時のプログラムは細かいところまでは覚えていないが、ブラームスの歌曲が1ステージあって、その中に「わが眠りはいとど浅く」、「秘密」などが入っていた。ベルガーはその時50歳を少し越したくらいの年齢で、ソプラノ歌手として決して若いとはいえなかったが、声は少女のように若々しく、日頃の精進を思わせる立派なものだった。リサイタルが終ったあと、私が今でも使っているベーター版のブラームス・アルバム第1巻の表紙にサインをしてもらった。

“Dōmo Arigatō! Erna Berger, 24.XII. 52”

とある。1952年のクリスマス・イヴのことであった。

つれづれ草1

この写真の顔は誰？



ブラームスの生涯を語る上に、切っても切れぬ縁のある人達はうんと絞っても数人は居る。この写真の人はその一人で、バイオリニストのヨセフ・ヨアヒムである。ヨアヒムは1831～1907と長生きした人で、ベートーベンやブラームスのバイオリンコンチェルトのカデンツ（今日われわれが聴くことができる）を書いたことでもよく知られている。また作曲をよくし、ブラームスに「ハンガリー風バイオリンコンチェルト」（作曲11）を捧げている。これは物凄い難曲であったらしい。

写真は佐藤謙三著「近世バイオリン演奏史」（昭和2年）からとった。

（坂本政明）